

## O2-022

## 外来患者呼び出しシステムの導入効果に関する検討

田嶋 華子<sup>1</sup>、高橋 美奈子<sup>2</sup>、小見淵 友子<sup>2</sup>  
 岡元 直子<sup>2</sup>、佐藤 その子<sup>2</sup>、山本 香絵<sup>2</sup>  
 鈴木 彩海<sup>2</sup>、小川 樹里<sup>1</sup>、野瀬 出<sup>3</sup>、柿沼 美紀<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 日本医科大学武蔵小杉病院 小児科

<sup>2</sup> 日本医科大学武蔵小杉病院 看護部

<sup>3</sup> 日本獣医生命科学大学 獣医学部

## 【背景・目的】

子どもの医療機関受診のタイミングは、保護者により決定づけられることが多い。患児を連れての病院受診はしばしば困難を伴い、体調不良で通常以上に機嫌不良の患児が待合室で静かに待てるかや、感染を心配して他の患者との接触機会を極力減らしたいなどの理由で受診が先延ばしとなる可能性がある。これまでの我々の研究では、特に感覚特性や言語表出の難しさをもつ児でこの傾向が強いことが示されている。しかし受診の遅れは診断・治療の遅れのリスクとなる。そこで我々は外来患者呼び出しシステムを導入し、その有効性につき質問紙法による調査を行い検討することとした。

## 【方法】

対象は日本医科大学武蔵小杉病院小児科外来を受診する患児の保護者で、来院時に小児科で外来呼び出しシステム（リモートリプライコール®）の受信機を貸し出し、診察の順番が近くなるまでの間、病院敷地内の自由な場所（院内外、駐車場も含む）で待機してもらった。ただし、発熱や感冒症状を呈している場合は、感染隔離室または自家用車内でのみ待機可とした。利用後に無記名で質問紙への回答を依頼した。

## 【結果・考察】

56名から回答を得た。5歳未満が55%を占め、定期受診が68%であった。約半数の保護者が「小児科待合室は狭い」「待ち時間が長い」と回答した。待ち時間をどのように過ごしたかに関しては、約半数が病院内のコンビニエンスストア、コーヒーショップ周辺や他の階の空いている場所、25%が小児科待合室内、20%が院外の自家用車やベンチで過ごしたと回答した。使用した感想では80%以上の対象者が「待ち時間が有効利用できた」「敷地内のどこにいてもよいので安心」、50%以上が「感染面での安心」「子どもを静かに待たせる必要がなく気楽」と回答した。また、患児の特性を問う質問では、37%が「病院の待合室で待つことが難しい」、34%が「待合室で大きな声を出してしまう」、30%が「待合室であちこち動きまわってしまう」と回答し、「待つこと」がネックで受診を困難に感じている保護者が少なくないことが示された。総合評価では85%が「よい」と回答し、外来呼び出しシステムの利用が小児科を受診する患児・保護者の負担軽減につながる可能性が示唆された。一方、自由記載欄では「呼ばれるまでの目安時間やあと何人かを可視化してほしい」との意見が複数あり、待ち状況を周知できることでより安心して待てることが考えられた。

## O2-023

## 神経発達症の初診外来における保育士の活動報告と有用性

杉山 全美、溝淵 雅巳、田中 智大、寺田 智子  
 静岡県立こども病院

## 【はじめに】

当院では令和3年度より、医師からの依頼で10歳以下の発達小児科初診外来に保育士が同席し、神経発達症（発達障がい）の子どもの支援を行っている。実際の保育士の同席は1名で、現在は病棟保育士2名が勤務を調整しながら担当している。令和5年度からは、病棟保育士4名で担当する予定である。

また令和4年6月より外来終了後、保護者向けに初診外来に保育士が同席していることに関するアンケートを実施している。今回、発達小児科初診外来に保育士が同席した活動報告と、更に保護者のアンケートからその有用性を検証したので報告する。

## 【方法】

医師から依頼を受けた10歳未満の発達小児科初診外来の児に対し、診察室内、診察室外（外来待合など）で個別支援を行う。個別支援の中での子どもの姿を診察終了後に医師と共有し、診察を振り返る。アンケートは、診察終了時に医師が手渡し、後日回収、集計をする。

## 【まとめ】

神経発達症が疑われる子どもは、環境変化に特に敏感だと推測できるが、遊んでいる中で次第に落ち着き始めることが多かった。その子に合わせた関わりをする中で、遠城寺式発達評価表に沿った支援、グッドイナフ検査の描画、読字、簡単な計算などを実施している。その結果は診察終了後に医師と共有し、その子どもの日常の姿に近い発達の現状から診断することにつながられている。保護者に関しては、アンケート内容から①子どもが安心して診察を受けられた②保護者が落ち着いて医師と面談で来た、と高評価を得た。アンケートの自由記述では、なぜそのような高評価をつけたのか、それまでに経験してきた保育士が同席しない診察との違いは何だったのか、など保護者からの声が聞かれた。

医師からは、発達小児科初診外来の子どもが保育士と落ち着いて過ごせると、保護者が安心した気持ちで診察室内で話をすることが出来、診察がしやすいと高評価を得ている。

そのような事から、保育士が発達小児科初診外来診察の際に子どもに向けた支援をすることは、様々な面で有用性が高いことが示唆された。